

第7話 保元の乱

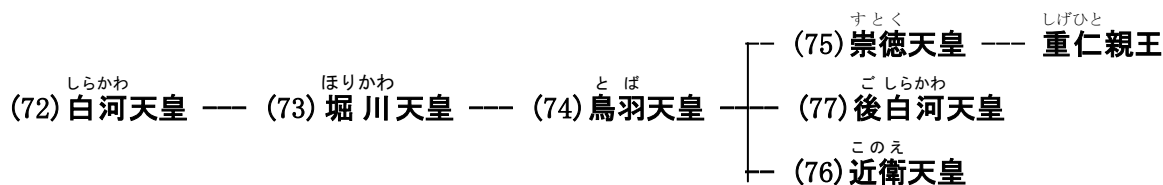
皇室の御争いに藤原氏の争いが絡んで、ひとつの戦いが起こる。武士の力でその乱は直ぐに鎮まったが、このために、その後は武士の力が直接に政治と関係を持つようになる。

奠都以来はじめての市街戦

第77代 後白河天皇の保元元年7月11日の朝早く、夜がまだ明けきらないうちに、恐ろしい戦争が京都の市中の賀茂川の方面に起こって、市民が驚く間もなく、焼討ちの黒い煙の渦巻と赤い焰の波とが凄じくあがったのを最後に、5,6時間の後には早くも全く終わっていた。

実にこの平安の都が奠められてから360余年、市中に戦争のあったことなどは未だ嘗て一度もなかったもので、賀茂川から少し離れたところの市民などは、盛んに燃えあがる火の手を眺めながら、ただの火事だと思っただけに此の戦争はあっけなく済んでしまった。しかし、この戦争が後の時代に与えた影響は実に大きかった。その時の年号が保元でしたので、歴史ではこれを保元の乱といいます。

が、一体、保元の乱はどういう戦いだったのか？ 誰と誰とが戦ったのか？ その原因は何でしたか？ これらの事を知るためには、先づその当時の皇室の有様をよく頭に入れておく必要があります。



保元の乱の原因

前にも述べた通り白河法皇は、堀川、鳥羽、崇徳の御3代、43年にわたって院政をなされ、崇徳天皇の御代の初めにお崩れになったが、その時には堀川天皇は既にお崩れになった後でしたので、鳥羽天皇が続いて院政をなされた。ところが、その後10年ほど経ってから、鳥羽上皇に皇子が生まれた。崇徳天皇とは御母の違った御弟です。上皇はこの皇子を非常に愛したあまり、ご誕生後間もなく立てて皇太子となし、2年の後に崇徳天皇に迫って御位を譲らせた。

しかしこの譲位は、天皇の眞の御心に反した事なので、容易にご承知ならなかったのを、上皇の近親が強いて迫ってその手続きをしてしまったと伝えられている。こうして次にお立ちになったのが第76代近衛天皇である。時に天皇は3才、崇徳上皇は23才でした。鳥羽上皇はこの時には既に髪を剃って法皇となっておられたが、お政治はやはり御自分でなさって、崇徳上皇にはお委せにならなかった。上皇は御位を無理に奪われた上に、政治には全く口を出すことすら出来なくされたので、非常にお憤りになった。しかしなにしろ、相手は御父君の事でもあるし、忍びに忍んで、日を送り、月を迎えて、侘し

第7話 保元の乱

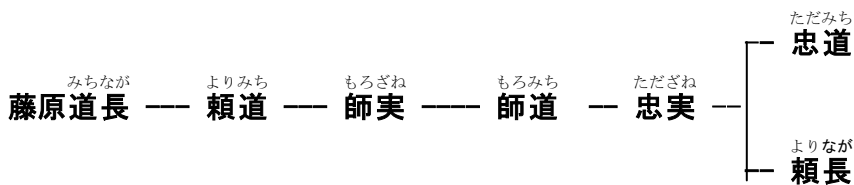
くお暮らしになっていました。

こうして14年の月日が経った時に、^{このえ}近衛天皇は僅かに17才で、^{かく}ご在位のままお崩れになり、まだ皇子もおわさなかったのが、^{すとく}崇徳上皇は、御自分がもう一度、^{みくらい}天皇の御位に即くか、それでなければ、^{おんこ}御子の^{しげひと}重仁親王が^{えいめい}英明で世間の^{じんぼう}人望も高かったのが、当然、この御子こそ御位を継がれることとおぼしめし、世間の人もそう信じていました。

^{すとく}崇徳上皇の御憤り

ところが、その際、どこからともなく、^{このえ}近衛天皇が若くしてお崩れになったのは、^{すとく}崇徳上皇が呪ったためである、という^{みょう}妙な^{うわさ}噂が立った。^{とば}鳥羽法皇はこれをお信じになって、^{にわ}俄かに^{ただみち}関白の藤原忠道とご相談の上、^{このえ}近衛天皇には御兄であり、^{すとく}崇徳上皇には御弟である^{まさひと}雅仁親王をたてて^{ごしらかわ}第77代後白河天皇となされた。^{すとく}崇徳上皇が^{まった}全く^{しつぼう}失望されて、^{ふんがい}大いに憤慨になったのはいうまでもないことです。

けれども、この皇室のご不和だけならば、恐らく戦いなどは起こらなかったでしょうが、そのころ摂関家の藤原氏にも^{なか}仲の^よ善くない兄弟がいて、^{たが}互いに^{けんりょく}権力を^あ争っていたために、それとこれとが^{から}絡み合っ^あて、ついに^{ひきお}大変な騒ぎを惹起こすことになったのであります。



摂関家の兄弟の不和

^{このえ}近衛天皇の御代に^ふ摂政、^{ただみち}関白を勤めていた藤原忠道と、^{よりなが}左大臣であった頼長とは、共に^{みちなが}藤原道長の^{ただざね}六世の孫で、^{ひとがら}忠実の子ですが、この兄弟の人柄は全く違っていた。

^{ただみち}兄の忠道は^{まこと}誠に^{おんこう}温厚な人で、^し詩や^{うた}歌にも^{たく}巧みであれば、^{ひつせき}筆跡も美しく、^{こじつ}朝廷の故実などにも一通りに^{つう}通じていて、^{おりあ}人との折合いもよく、常に自分の^{しよくむ}職務を^{ちゆうじつ}忠実に守って行くといったような人です。即ち、^{めいぎ}名義ばかりの^{まんぞく}摂政や^{まんぞく}関白になって満足していれば、それで役目の^{もつと}済む院政の時代などには最も^{もつと}適当な人でした。

^{よりなが}弟の頼長は全くこれに反して、自分が一度正しいと信じたことは、どこまでもこれを^{しゅちよう}主張し^{とお}通すといったような、^{ごうじよう}正しいけれども、^{たんき}強情で、^{おこ}短気で、^{おきな}わがままで、^{おきな}怒りっぽい人でした。彼は幼い時から^{しゅうさい}非常な秀才で、^{しいか}詩歌や^{かんげん}管弦の^{わざ}技をはじめ、^{こころえ}当時の貴族の心得ているべき事には^{ことごと}悉く達していた上に、^{わかん}和漢の^{がくもん}学問に^{ひい}秀でて、^{れきし}日本の昔からの^{ほうれい}歴史や^{まも}法令などにもよく通じていました。それだけに、^{もつと}専ら心を^{へんたい}天下の政治に向けて、^だ院政のような^だ変態の政治は1日も早くこれを打破して、元の藤原氏の^だ摂関政治に^{ふく}復そうという考えを持っていた。彼は^{しいか}詩歌や^{しよどう}書道などは、^{まつぎ}国家に用のない^{まつぎ}末技だといって、^{ただみち}兄の忠道を^{くぎよう}始め、^{ののし}当時の公卿らを罵っていたような人でした。

それに、2人は兄弟といっても、年は20才以上も違い、母親も違っていた。その頃、宇治に退隠していた父の忠実^{ただかね}は、若い頼長^{よりなが}が才もあり学問に優れているのを愛するあまりに、兄の忠道^{ただみち}に迫って関白を頼長^{よりなが}に譲らせようとしたが、忠道^{ただみち}は頼長^{よりなが}の人柄を憎んでいたもので、これを承諾しなかった。そんな事から父の忠実^{ただかね}と兄の忠道^{ただみち}との間も仲が悪かったが、忠道^{ただみち}と頼長^{よりなが}との間は殊にそれが甚だしく、頼長^{よりなが}は兄の忠道^{ただみち}が大した才能もないのに関白になっているために、自分の望みを達することの出来ないのを常に不平に思っていました。

そういう時に近衛天皇^{このえ}がお崩れになって、後白河天皇^{ごしらかわ}のご即位となり、崇徳上皇^{すどく}のご憤慨^{ふんがい}という事が起こったのです。

思うようにならなくて不平であった頼長^{よりなが}は、同じくご不平でおられる崇徳上皇^{すどく}の御所^{ごしょ}に参って、お慰め^{なぐさ}申していたが、そのうちに、上皇のお子の重仁親王^{しげひと}を御位^{みくらい}に即け奉^つって、自分が関白になろうという考え^{たてまつ}を起こしたのです。けれども、その時にはまだ鳥羽法皇^{とば}が院政をお続けになっていたもので、密かに考え^{ひそか}を起こしただけで、よい時機^{じき}が来るのを待っていました。

とば ほうぎよ 鳥羽法皇の崩御

すると後白河天皇^{ごしらかわ}の即位の翌年、その四月に保元と改元して間もなく、鳥羽法皇^{とば}は俄かに重いご病氣^{にわ}に罹^{かか}って、次第^{しだい}にお悪くなり、ついに7月2日に、京都を南に二里(8 km)離れた鳥羽の離宮^{はな とば りきゅう}でお崩れになりました。

その時、崇徳上皇^{すどく}は鳥羽の田中殿^{たなかどの}という御所におられたので、御父法皇^{きどく}のご危篤^{おどろ}を聞くと、驚いて、お見舞い^{みま}にその御座所^{ざしょ}に御車^{くるま}を急がせられた。御門前^{もんぜん}まで行くと、法皇^{きんしん}の近臣^{きんしん}が上皇の御車を止めて、「法皇のご命令^いですから、お入れ申すことは出来ません」といって、無理^おに押し返した。上皇^{かえ}は非常にご立腹^{りつぶく}になったが、どうすることも出来ないので引き返された。上皇^{よりなが}が左大臣^{はか}頼長^{なにごと}と謀って、何かを企^{くわだて}ているという噂^{うわさ}が立っていたためでもあったろうが、これは確かに穏当^{たし}な仕打ち^{おんどう}とは言えません。

よりなが 頼長が兵を集める

その頃、頼長^{よりなが}は宇治の邸^{やしき}に引き籠^ひって様子^{こも}をみていましたが、彼の家来^{ようす}の源親治^{ちかはる}が6日に京都の東山^{ちかはる}で捕縛^{ちかはる}せられた。8日には勅令^{ちやくれい}が下って、忠実^{ただかね}や頼長^{よりなが}に属する諸国^{ぞく}の荘園から武士が上京して来るのを禁じられ、今はもうぢっとしてはおられなかった。ぐづぐづしていると、手も足も出ないようにされてしまいそうだからです。で、その翌日、崇徳上皇^{すどく}が鳥羽の田中殿^{しらかわどの}を出て、京都の賀茂川^{しらかわどの}の東の白河殿^{しらかわどの}にうつられると、頼長^{よりなが}も宇治を立て、その夜のうちに密かに白河殿^{しらかわどの}に入った。そして直ぐに身方^すの兵^{みかた}を招集^{しょうしゅう}しました。

けれども、この時にはもう源義朝^{みなもとの よしとも}、平清盛^{たいらの きよもり}を始めとして、源平の重なる武士は大抵後白河天皇^{おも}方^{たいてい}でお召^{ごしらかわ}しになってしまった後^{あと}でしたから、名のある武士はいくらも集まらなかった。平清盛^{たいらの きよもり}の叔父^{おじ}の忠正^{ただまさ}などがその最^もも重なる者^{おも}で、外^{ほか}にはこれというほどの人もいなかった。そこで頼長^{よりなが}は崇徳上^{すどく}

第7話 保元の乱

をすることが 20 余度に及び、城を落とすことが数十ヶ所にのぼったというのを見ても、いかに彼が人にすぐれて軍が上手であったかが分かります。

彼は身の丈が7尺(210cm)ばかりもあって、左の手は右の手よりも4寸(12cm)長く、すぐれて長い矢を引いたために、その弓勢は恐ろしく強かった。僅か3年の間に殆ど九州全体を攻略して、ずいぶん乱暴な事をしたために、九州の国々からしきりに彼の不法を訴えて来た。朝廷では命を下して、幾度も呼び返されたが、戻って来なかったのも、ついに父為義を罰して検非違使の役を取り上げられた。

為朝はこれを聞くと、自分のために父に難儀をかけては申し訳ないと、いさぎよく罰を受けるつもりで急いで都に上って来た。その時にたまたま保元の乱が起こったので、即ち父に従って上皇の御所に参ったのであります。

為朝等が参上すると、上皇には非常なご満足で、頼長も大いに喜んだ。早速、為義、忠正以下の諸将に四方の門を守らしめたが、その時、為朝は「わたしは親とも兄とも別にさせていただきます。高名も不覚も紛れぬように、只一人いかにも強そう所に向けて下さい。たとえ敵は千騎であれ万騎であれ、必ず一方は射止めます」といって、最も大事な西河原表の門を固めた。

上皇方の軍議

やがて軍の評議が始まって、頼長が合戦の手段に就いて意見を申せと言うと、為朝は畏まって、「私は久しく鎮西に在って九州の者共を打従え、しばしば合戦をいたしました。それについて考えてみますに、勝利を得るには夜討ちに越したことはありません。今夜、只今から直ぐに皇居に押し寄せ、三方に火をかけ、一方から攻め立てれば、たとえば兄の義朝などこそよく戦いましょうが、これとてわたしが一矢で射止めるまでのこと。況して清盛などのへろへろ矢は何程の事がございましょう。鎧の袖で払いのけ、蹴散らして捨てればおしまいです。勝負は、まだ夜の明けない間についてしまいます」と思うがままを無遠慮に述べ立てた。

頼長はこれを聞いて、「為朝が申す所は誠に乱暴である。年の若いせいでもあろう。一体、夜討ちなどという事は、その方共が同士軍で、10騎20騎の場合の事である。今は天皇と上皇とのお国争いで、源平の武士が数を尽くして、両方に在って勝負を決しようというのであるから、軍は堂々とやるべきである。夜討ちなどはよろしくない。それに、明日の朝は早く、奈良の法師らが吉野の僧兵をも率いて、千余騎でこれにまいる筈だ。それを待ち合わせてから合戦を始める事にしよう」といって、為朝の謀を用いなかった。

為朝はうわべは納得してその場を退いたが、「合戦の道は朝廷の礼儀作法とは別のもので、これは武士にこそ任せべきであるのに、その道のものでもない公卿の考えなどで決めて何になろう。義朝は武略の奥義を究めている者だから、定めて今夜、攻め寄せて来るだろう。明日までも延びればこそ、吉野の兵も奈良の法師も役に立とうが、今夜のうちに押し寄せられて、風上に火を放たれたならば、戦ったとて勝てるものか。いまましい事である」といって残念がった。

第7話 保元の乱

実際、上皇方はこの通りで、まだ準備が出来ていなかったし、集まった人数も少なかった。天皇方は既に早くから手廻しをしていた上に、法皇がお崩れになると直ぐにご遺言だといって、源義朝、平清盛を始め、源平の重立った武士を残らず身方につけてしまったので、その人数も多かった。

これには少納言入道信西という学問も才能もある法皇の近臣が、関白の忠道を輔けて、いろいろの計略を立てたのがうまく当たったのです。

天皇方の軍略

源義朝

さて、天皇方でも軍の評議は始まった。先づ源義朝に、合戦の法を問うと、義朝は畏まって、「合戦の手段はさまざまありますが、早く敵を従えて勝ちを得るには夜討ちに越したことはありません。聞けば、奈良の法師らが、吉野の者共と共に明朝は京都に着くとの事でありませぬ。敵に勢いのつかぬ前に押し寄せましょう。忽ち勝負は決ましましょうから」と申し上げた。

信西は関白の旨を受けて、「それがよかろう。軍の事は武士でなければ分からない。すべてその方の計らいに委せるぞ。誠に先んずれば人を制し、後れば人に制せられるということがある。今夜の夜討ちは結構だ」といって、評議は決した。上皇方と違って、ここでは武士の意見がそのまま採用されたのです。

で、いよいよ出発の間際になると、信西は更にまた源平の諸将を集めて言いました。「敵は朝敵であるぞ。対等の軍をするのではない。朝敵の征伐に向うのだぞ。その覚悟で堂々と進め！」

この時、義朝は、馬上でさっと開いた日の丸の軍扇で胸のあたりをはたはたと扇ぎながら、「武士として戦場に向ったことはたびたびですが、たしかに朝敵ときまった相手に、追討の宣旨をいただいて向うのは今日が初めてです。この心の涼しさありません」といって、躍り上がって喜んだということです。多分、彼はこの一戦に勝利を得れば、しばらく抑えられていた源氏の勢力を再び元に復すことが出来ると想ったのもあったでしょう。

白河殿での夜討ち

上皇方では、軍は何れ明日の事と、悠々と構えていると、様子を見にやった者があわただしく馳せ帰って、義朝、清盛以下の諸将が総勢1,100余騎を率いて押し寄せて来たと言進した。頼長はあわてた。為朝は、「それ見た事か、いわぬ事ではない」と大いに怒ったが、今更どうしようもない。頼長は為朝の機嫌を取ろうとしてか、俄かに上皇に願って彼を蔵人という役にしたが、為朝は、「敵が既に前に来ているのに、蔵人も何もあつたものか。人々は何にでもなるがいい。為朝は元の鎮西八郎で沢山だ」と、僅かに二十八騎の家来を連れて、防禦の陣に向った。

為朝の奮戦

合戦は始まった。真っ先に彼に陣へかかって来たのは清盛の家来でした。伊勢の国の住人古市

第7話 保元の乱

いとう かげつな いとう いとう なりの ためとも なんじ しゅじん きよもり ふそく
の伊藤武者景綱、同じく伊藤五、伊藤六と名告をあげると、為朝は「汝が主人の清盛でさえ不足と思う
のに、景綱ならば引き退け」と相手にしない。 景綱は怒って、「下郎の射る矢が立つか立たぬかご覧
よ」と、引き絞って射たが、為朝はこれを事ともせず、「相手に足らぬ敵と思うが、いと事の感心なの
で矢をひとつつけてやる。受けてみよ」とひょうと射ると、真っ先に進んだ伊藤六の胸を射通して、うし
ろにいた伊藤五の鎧の袖に突き当たった。 見ればその鏃は鑿のごとく、長さは7寸5分(22.5cm)も
ある。 何という恐ろしい弓勢だろうと、見る者は口々にいってしりごみする。

きよもり かなら もん むか わけ
清盛も恐れをなして、「何も必ずこの門に向えと言いつかった訳ではない。 何となく押し寄せただ
けのことである。 外の門に寄せるとしよう」と引き退くと、嫡子の重盛は、その時19才の若者だった
が、「勅命を蒙って向った者が、敵陣が強いと引返す法はない。 続けや若者共」と駆け出し
た。 清盛はこれを見て、「馬鹿な事だ！ 早く留めろ！ 為朝の弓勢の恐ろしい事は見た通りだ。 つ
まらぬ事をするな」と、無理に引き留めさせて、共に外の門へと向った。

よしとも ためとも おうしゅう 義朝と為朝の応酬

そのあとに来たのがよしともの家来のかまたまさいえの鎌田政家である。 百騎ばかりで押し寄せて、名告をあげると、ぐ
っと引きしぼって放った矢が、ためとも かぶと しころ あた ためとも なんじごと
為朝の胃の鏝に中った。 為朝は大いに怒って、「汝如きに矢を使う
は惜しい。 手取りにしてくれる」と駆け出すと、例の家来の28騎も続いた。 まさいえ
政家は驚いて、逃げて、
逃げて、5丁も逃げた。

ためとも よしとも
為朝が引き返すと、今度は兄のよしとものが200騎を率いてやって来た。 彼は黒い馬に黒い鞍を置いて乗
っていたが、あぶみ ふ ぼ つ た あ だいおんじょう
鎧を踏ん張り、突っ立ち上がって、大音声に、

せいわ こういん しもつけの かみ みなもの よしとも ちよくめい こうむ まか むか
「清和天皇9代の後胤、下野守源義朝、大將軍の勅命を蒙って罷り向う。 若し一家の者
ならば速やかに陣を開いて退散せよ」と呼ばわると、ためとも
為朝は聞きも終わらぬうちに、

ほうがんだの ほうがん けびいし い ためよし かんめい いんぜん こうむ みかた
「御父判官殿(注：判官は検非違使の尉の事で、為義の官名である)が院宣を蒙って身方の大將軍
になっておる。 その代官として、鎮西八郎為朝が一陣を承って固めておりますぞ」と答えた。

よしとも はる ぶれい
義朝は重ねて、「さては遥かに下の弟か。 兄に向って弓を引くとは無礼ではないか。 その上、これ
はちよくめい こうむ おんつか れいぎ ふ こうさん ためとも
は勅命を蒙った御使であるぞ。 礼儀を知らば弓を伏せて降参せよ」というと、為朝は又「兄に向っ
て弓を引くのが無礼であるとは尤もである。 正しく院宣を蒙った父に向って弓をひくのはいかがであ
るか」という。 さすがのよしとも どうり つ
義朝も道理に詰まったのであろう、それきりで何もいわない。

ためとも よしとも かぶと ほし い 為朝、義朝の胃の星を射る

合戦はそこでもここでも盛んになった。 よしとも う ためとも
義朝の部下がまっしぐらに撃ってかかって来るのを為朝は
しばら ささ ようや むら よ てきへいご
暫く支えていたが、漸く明けはなれた朝の光の中で、群がり寄せる敵兵越しに向こうを見ると、大将の
よしとも げち かつこう ぐあい よ
義朝が大きな馬の上に突っ立ったようにして下知をしている格好が、いかにも射るのに具合が良かったか
ら、こいつはうまいと、例の大矢を番えて一矢で射落とそうと身構えたが、「待てよ、若しかすると父と兄
との間に、たす やくそく かぎ おど
負けた場合に助けあう約束がないとも限らない。 ただ嚇かすだけにしてくれよう」と、わざ

第7話 保元の乱

と兄の胃の星を狙って矢を放った。

狙いは違わず、矢は義朝の胃の星を射削って、遥か向こうの門の柱に突立った。義朝は手綱を搔い繰りながら面を向けて、「何だお前は、評判ほどにもなく下手ではないか」とたしなめると、為朝は「兄上でもあり、聊か思う仔細があって、わざと星をいたのですが、お許しがあればどこなりと、ここという処を射て見せましょう」と大矢を取って番えたので、大将を射られては大変と、家来の1人が義朝の馬前に駆け寄って塞いだために、矢は飛んでその者を射殺した。

ますます合戦は烈しくなる。為朝の矢に中る者で助かるものはなかったが、彼のほうにも討たれるものは続々出た。それはこの門ばかりではなかった。他の門でも同じであった。攻める者と防ぐ者が互いに名を知り顔を見知りあっているので、恥を思っ一歩も引こうとしない。そこでもここでも入り乱れて、引くな進めと火花を散らして戦う様は、1,000騎が10騎になっても終わりそうには見えなかった。

上皇方の敗北

義朝は使いを内裏に遣わして、「夜の中に勝負を決しようとして烈しく攻めましたが、敵も中々よく防いで敗れません。今は火をかける外には方法がありませんが、風下には白河法皇のお建てになった法勝寺などもありますから、或いはこれも焼けるかと思えます。いかがいたしましょう」

と申し上げると、例の少納言入道信西が承って、焼けても構わないから、早く叛徒を誅するようにという仰せが下ったので、即ち義朝は火を風上に放って上皇の御殿を焼き討ちにした。

火は炎々と燃え上がる、西風の烈しい折柄ではあり、忽ち黒い煙が焰と共に八方に吹き広がったから、これにはいかに勇猛な為朝らも手の施しようがなかった。見る見る上皇方の大敗北となり、為朝、忠正の諸将を始め、思い思いに落ちて行く。

崇徳上皇らもお逃げになって、都の北から郊外の仁和寺に入っご出家なされた。頼長も逃げだししたが、道で流れ矢に中って死んだ。

義朝に父為義を斬らせる

為義はその子らと共に一先づ東国に赴こうと近江まで逃げて行っが、運悪く病気に罹って進むことが出来なくなったために、子らとも別れ、為朝が口を極めて諫めたにも拘らず、ついに義朝を頼って降参した。平忠正も清盛を頼って降参した。2人は共に子の義朝や甥の清盛が天皇方で手柄があったので、それに免じて赦して頂けると思ったのです。ところが、清盛は以前から忠正とは仲が悪かった上に、自分が叔父を殺せば、義朝も父を殺さなければならなくなるであろうとの考えから、朝廷のご命令が下るや否や、忠正を殺してしまった。

果たしても義朝にも為義を斬るようにとのご命令が下った。義朝は大いにこれを歎いて、自分の手柄に代えて父の命をお助けて下さるようにとたびたびお願いした。朝廷では、清盛が既に叔父を誅

第7話 保元の乱

したのに、^{よしとも}義朝は何を彼^{なに}は^{かれこれ}いっているのだ、^{よしとも}義朝が命令を奉じないならば、他の武士に命じてころさせるだけであるとして、どうしてもお許しにならなかった。^や止むなく^{よしとも}義朝は家来の^{かまたまさいえ}鎌田政家に命じて父を斬らせた。彼の弟も5人は間もなく捕らえられて、殺されたが、^{ひと}独り^{ためとも}為朝だけは、まことに^{めづら}珍しい^{ゆうし}勇士だからとて、特に死^{しいちとう}一等^{げん}を減じて伊豆の大島に流された。

このほか、上皇方になった公卿や武士はすべて斬られたり、流されたりして、そのまま赦されたものは一人もいなかったのみならず、既に髪を剃ってご出家なされた^{かみ}崇徳^そ上皇^{すどく}までも、四国の讃岐に遷され給い、御子の^{しげひと}重仁親王も髪を剃ってお坊さんにさせられた。

ひとのみちち お 人道地に墮つ

実にこの保元の乱は、戦った者は皇室も、公卿も、すべて是れ親子、兄弟、^{しゆくてつ}叔姪^{あいだがら}の間柄^こでして、その結果としては兄を流し、父を斬り、叔父や弟を殺したのです。

権力を自分1人のものにしようがために一家一族の間で争うことは、藤原氏には珍しくなかったのですが、この時にはそれが皇室の御不和と絡んで、ついに武家の間にまで血で血を洗う事を引き起こさせました。中でも^{よしとも}義朝に父を斬らせたことは、まことに驚くべき事^{ほろ}でして、天の道も人の道も滅びたのかと後の世の人をして嘆息せしめています。朝廷が命じて死刑を行ったのは、第52代^{さが}嵯峨天皇^{こうにん}の弘仁元年に^{なかなり}藤原仲成^{ちゅう}を誅して以来、26代、345年の間、絶えてなかった事^たですのに、この時には、例の^{しょうなごんにゅうどう}少納言入道^{しんぜい}信西^{ちようてき}が、「朝敵は皆殺さなければいけない」と主張したために、子として父を斬るといような大不幸な事までさせたのであります。

^{すどく}崇徳上皇^{さぬき}は讃岐でその後九年をお過ごしになり、第78代^{にじょう}二條天皇^{みよ}の御代に御年46でその地でお^{かく}崩れになった。その御陵は今の高松市の西五里(20km)、香川県^{あやうた}綾歌郡^{しらみねさん}松山村^あの白峰山に在り、白峰御陵^{しらみね}といひます。又、有名な讃岐の^{ことひらぐう}琴比羅宮には上皇をも^{まつ}祀^{まつ}つてある。又、御子の^{しげひと}重仁親王は上皇よりも6年先に、同じく^{にじょう}二條天皇の御代に京都の寺^{かく}でお^{かく}薨れになった。お年は23歳でした。



香川

しらみねのgoriyō
白峰御陵

ためとも 為朝、大島に流される

ところで、^{ためとも}為朝はその後どうなったか？ 珍しい勇士であっただけに彼にはなお後日の物語がある。初め、彼は父や兄弟と別れてから、近江の^{わか}輪田^{おうみ}というところに隠れて、再び九州へ下る隙を^{かく}窺^{かく}つていたが、あいに病気に罹ったので、しばらく静かに^{ようじょう}養生^{うった}していた。たまたまそれを見つけて^{うった}訴^{うった}え出た者があつたので、密かに都から下って来た討手の兵は、彼が湯に入っている時を狙ってその浴室を^{ねら}囲^{よくしつ}んだ。^{ためとも}為朝は素裸のまま水桶などを^{みづおけ}擔^{にな}う棒^{ぼう}をふるって多くの者を打ち伏せたが、何分にも^う病^ふ中の事^{びょうちゅう}で

第7話 保元の乱

はあり、相手は大勢で、ついに捕らえられて京都に送られた。 朝廷ではこれをも殺すがいいという人が多かったが、合戦の時からすでに50余日を過ぎていたし、且つ又、容易に得難い勇士でもあるからというので、さてこそ特に死一等を減じて伊豆の大島に流されたのであります。

尤も、健全な体のままでは、根が乱暴者の為朝の事ですから、何をまたやり出すかも知れないからと、肘の筋を切って流されました。 その当座は腕の力も多少は弱っていましたが、しばらく経って肩の工合が癒ると、以前よりも却って長い弓を用いたので、その弓勢は昔に劣らなかったということです。

為朝、琉球に渡る

彼は又、大島は朝廷が自分に賜ったのだといて、全く自分の領地のように振舞ったのみならず、附近の島々をも攻め取って威を振るっていたが、ついに二條天皇の御代には、小船で遠く琉球に渡ってこれを征服し、そのこの豪族の妹を妻として数年ほど居た。 その間に尊敦という男の子が生まれたが、この尊敦もまた父に似た勇士であったので、成長の後に推されて琉球王となり、その子孫は相継いで明治の世まで及んだ。 戦前の尚公爵家は即ちこの琉球王の家だということです。

為朝の最後

さて為朝は琉球に数年いてから、尊敦及びその母をそこに留めて自分はまた大島に帰ったが、次第にわがままな振舞いをするようになったために、第80代高倉天皇の御代に、朝廷は伊豆の役人に命じてこれを討たせた。 為朝は20余艘の兵船が近寄って来るのを見ると、「例え10,000騎であろうとも、撃破って遁れようと思えば遁れられるが、この上、勅命に背いては申し訳がない。 どうせ助からぬ身上であるから、終りはいさぎよくしよう」と覚悟を定めたが、それにしても、矢を一つ射てから腹を切ろうと、真っ先に300余人の兵を乗せて進んで来た一艘の船に矢を放って、難なくこれを射沈めると、即ち家に入って柱に背を当て、立ちながら腹を切って死んだ。 時に年は32歳でした。

此の時、彼の死体は立ったままで倒れなかったのが、程経て漸く上陸した討手の兵らは、恐れて容易に近づかなかった。 中でも最も勇気のある一人が、そつと後ろから薙刀を以って狙い寄って、その首を撃落したということです。 死んだ後まで彼はかつと眼を見開いて、討手の兵らを怖ぢ恐れさせたのであります。

(第7話 保元の乱 終わり。 次は前頁に戻り、 第8話 平治の乱へ)